
幕末異聞 疾風録～花薫る京の嵐

花衣 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末異聞 疾風録〜花薫る京の嵐

【Nコード】

N9122E

【作者名】

花衣 悠希

【あらすじ】

幕末の京都で新選組の沖田総司は一人の少女と出会う。果たしてこの出会いは運命だったのか、その裏で密かに進められる陰謀に巻き込まれていく……。<ご注意>この作品は、思いつきり史実をふつとばしたファンタジーです。登場人物の性格を含め、こんなものもありかなと（かなり強引ですが）、大目に見ていただける方を読んでいただきたいです。

第1話：出会い

時は幕末、所は京の都。

壬生の界限に新選組なる浪士組ができた頃――

幕末とはいえ、まだまだのんびりした雰囲気が漂っていたそんな頃。

島原は活気があって、華やかで艶やかであった。

そのはずれに沖田総司は座っていた。何をする訳ではない。ぼーっと人の流れを見ているだけである。

どの人たちも楽しそうに笑いながら、それぞれの店に入っていく。

実は彼はここに来るのは初めてではない。

でも何度来てもきらびやかな一種独特の雰囲気になじめなかった。

（そろそろ帰ろうかな・・・。）

最近では他の仲間についていって、皆がそれぞれに遊びだし、彼のことを気に留めなくなるのを見計らって帰っているのであった。

総司はやおら立ち上がると袴についた土ぼこりをはたいた。

その時――

「――」

不意に人の気配がして振り返った。手は無意識に刀の柄にかかっている。

「あの・・・ごめんなさい。驚かせちゃった？」

（女の子？）

見ると、色白の目のくりつとした少女が少し申し訳なさそうにこちらを見ていた。

「あ、いえ・・・」

少し緊張をとく。そして、ふと気づくとあわてて手を柄から離す。

「あなた、最近よくここに来てるよね？」

見られてたのか。動揺は隠せない。

「何してるの？」

声にかげりはない。返事をしても問題はない・・・か？

「何って別に・・・。まあ、付き合いで来ているだけです。私、どうもこの雰囲気が苦手で・・・。ははは、馬鹿みたいですわね。」
言ってしまったてからすごく落ち込む。ああ、本当に何やってんだかがつくりうなだれる。

「・・・誰も見てないと思ってました。あなたはなぜここへ？」

「私は、お母さんがここで働いているから、手伝いに。」

あの・・・その窓からここが見えてたから・・・。」

そしてその窓を指差した。「いと屋」。看板が目に入る。

「私ね、いつか声掛けようと思ってたんだ！」

少女の声はどことなく楽しそうだ。

「そ、それは私があまりにも情けなかったからですか？」

「私、ここにいるからよく分かるんだ。いい人だって。あなたみたいな素朴な人、見たことないもん。」

「私なんて全然面白くないですよ？」

「それは、私が決めることよ。」

少女は近づいて総司の顔をじっと見た。あまりの迫力に思わずたじろぐ。

遠くから声が聞こえてきた。少女を探している声だ。少女は声の方を振り返し、また総司の方を見た。

「ねえ。また来るんでしょ？」

「それは・・・多分。」

「来たら、またここにいてよ。約束よ。私、ずっとっていうの。あなたは？」

「総司。・・・沖田総司。」

「総司くんね。あ、そうそう、これ渡そうと思ってたんだ。」

胸元からなにやらごそごそと小さいものを取り出す。そして、半ば強引に総司の腕を引っ張り手の中にそれをつかませた。

「店用のなんだけど、くすねてきちゃった。結構高いらしいよ、これ。」

いたずらっぽく笑ったその顔につられて、総司も笑ってしまった。

「じゃ、またね。総司くん。」

彼女は駆け出して行ってしまった。

総司はそれをいつまでも見つめていた。心の中に何か暖かいものが灯った気がした。

にぎられた手をおそろおそろ開けてみると、そこにはピンク色の花の形をした練り菓子があった。

彼女の香りがした様な気がした。

第2話：偵察

さて、そんなことがあつてから数週間後。

場所は変わつて、京都、壬生。

八木邸の前にこの鄙びた土地とはおよそ不釣り合いな人影が二つあった。

「あのー。ここのご主人ですか？私は長州藩士、桂小五郎と申します。ここに新選組局長の近藤勇殿はいらっしゃいますでしょうか？」
礼儀正しい青年であるが、どこか顔色が青い。

「はい。少々お待ち下さいませ。」

主人が奥に入っていくのを見計らつて、もう一つの影が動く。

「こいつら本当に気にかけてねばならん奴らか？ただのごろつきの集まりじゃねえの？」

「まあ、下はそうかもしれませんが、幹部あたりはかなり腕が立ちます。昔江戸にいたとき彼らの道場に伺ったことがあります、実践的で荒っぽい剣法でした。私は要注意かと。」

「ふーん。荒っぽいのはともかく、実践的っていうのがきになるな。近頃の剣法は形ばかりのちゃらちゃらしたのが多いからな。」

齒に衣着せぬ言動に小五郎は思わず苦笑する。

「ときにお前、胃の調子はどうなんだ。まだ胃薬常備か？体弱いな。」

「仕方ありませんよ。江戸詰めから京都詰めになつて気苦労が倍増ですから。訳も分からず京都に出てくる長州の連中が多すぎてまとめきれません。まあ、誰が仕組んでるかは明白なんです。」

遠目に長刀を持った親友の姿を思い浮かべる。

「やあ、桂さんではないですか。わざわざのお運びありがとうございます。」

突然の大声で二人が振り仰ぐと、そこには満面の笑みで出迎える大柄の人物が立っていた。これが局長、近藤勇か―。

「江戸ではお世話になり申した。ささつ、どうぞ中へ。」

「近藤さん、相変わらずお元気そうでなによりです。近くまで来たものですから、ちよつとご挨拶にと。残念ながらすぐに出なければなりませんので、玄関先で失礼させていただきます。」

「そうですか・・・それは残念・・・はて？こちらにおられる方は？」

「あつ、申し訳ない。紹介し遅れました。こちら肥後熊本藩士、宮部鼎蔵です。私の古い友人です。」

「宮部です。どうも。」

宮部が差し出した手を無意識に近藤が握る。

「近藤です。よろしくお願い申す。」

お互いしばらく顔を見合わせたまま動かない。

一時して、

「では、そろそろ参りましょうか。」

小五郎が声をかける。

「ああ。」

「では、またいつでもいらして下さい。」

近藤が深々と頭を下げた。

* * *

壬生から二条に向かう道すがら小五郎が口火を切った。

「どうでした？」

「あれだけでは何ともない。ただ。」

「ただ？」

「手が厚かった。」

「？」

「竹刀だこができていた。あれは今も相当鍛錬している手だ。」

宮部は自分の分厚い大きな手を見た。

「・・・何を考えてます？」

小五郎がげんそうな顔で宮部を見た。

「何を考えてもいいですけど、あんまりややこしいことしないで下さいね。頼みますよ。」

「ああ、分かっている。」

言いながら、宮部の目は鋭く光っていた。

* * *

一方、八木邸の近藤勇は――

そのまま金縛りにあったかのように、ひきつった笑いを浮かべながら硬直していた。

そして、一時経って大きなため息をつく、のそのそと部屋の中に入り、畳の上にごろんと仰向けに大の字になって倒れこんだ。

そして第一声、

「はゝ。やばかった。」

あまりの大声に隣の部屋にいた永倉新八が顔を出した。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃねえよ。今さっき、桂さんが来やがった。」

「ええ?!」

「なんか宮部っていう浪士連れててよ。なんか目がまともじゃなかった。あれきつと偵察だぜ・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「芹沢さんたちが外出中で良かったですねえ。あの人たちがいたら何しかすか。」

「・・・俺、敬語上手くしゃべれてたかなあ？使ったことねーも
ん。」

近藤の不安はそこらしい。目はあさつての方向を向いている。新八
はため息をつくと、すたすたと隣の部屋に行ってしまった。

第3話：うわさ

隣の部屋では、藤堂平助が黙々と愛刀の手入れを続けていた。

新八はその隣に荒っぽくどかつと座った。

「どうでした？」

「あまりの馬鹿馬鹿しさに声もでん！敬語が上手く使えたかどうか
ーだと。そんなもんどっちでもいいじゃねえかつ。」

あまりの剣幕に平助は刀を落とすそうになる。

「まあまあ。たいしたことなくて良かったじゃないですか？」

「それはそうだが・・・。」

ポンポンポン・・・。平助の刀のさび止めの粉をつける音だけが部屋の中にこだまする。

しばらくして、新八が口火を切った。

「ああ、そうだ、知ってるか？あの総司に女がいるらしいぞ。」

「ええっ？！それ本当ですか？」

平助は再び刀を取り落としそうになった。

「ああ、この前左之が総司に頼み込まれて買い物に付き合ったらしい。左之の奴、めっちゃめっちゃ興奮してたぜ。」

「一体何の買い物だったんですか？」

「女物のかんざし、だよ。」

「えーっ。信じられません。だってあの人、島原行つてもどこも入らずにドロンと消えちゃうじゃないですか。それお姉さん用じゃないんですか？」

「いや、女といえるのを斉藤も何度も見ているらしい。あいつ、口が固いから全くそんなそぶりも見せてなかったがな。」

「それにしてもなんで原田さんなんかに同行頼んだんですかねえ。もう組じゅう誰も知らない人がいないほど広まっちゃいますよ。」

「他の奴はともかく、近藤さんと土方さんがなんと云うか・・・だな。」

「誰が何を言う―だ？」

まさかの意外な声に思わず振り返る二人。

そこには外から帰ってきたばかりの土方歳三が立っていた。彼は所用で数日屯所に帰っていなかった。

だからますます自分のことが話題に上がったことが不愉快らしかった。

（ああ・・・また眉間にしわがよつてるよ・・・。）

二人は顔を見合わせた。おそろおそろ平助が答える。

「あの・・・多分驚かれると思うんですけど、沖田さんに―。」

「女がいるって話だろ。」

ズバツと言いつたれて困惑する平助。

「なんでそのこと知って・・・？」

「さっきそこで原田から聞いた。総司の奴、勝手に・・・許さねえ。」

本気の怒声に新八が慌てる。

「いやちよつと待て、土方さん。総司だって男だし、女の一人や二人いても全然おかしくないだろ？むしろ自然じゃ？」

歳三はキツと鋭い目を新八に向けた。

「俺が怒ってんのはそんなことじゃねえ。女の四、五十人くらいいて当たり前だ！」

（いや・・・それは言いすぎ・・・。）

「あいつ、なんでよりによって原田なんか誘いやがった！」

「は？」

「何で先に俺に一言もない！俺が怒ってんのはそのことだ！」

あんのヤロー、帰ってきたらぶつとばしてやる！」

啞然とする二人を尻目に歳三は荒々しく隣の部屋に行ってしまった。・・・しばらくして隣の部屋から近藤局長の涙声と歳三の怒声が響き渡ったのであった。

「・・・こんなんで、組、大丈夫なんでしょうか？」

「・・・俺に聞くな。」

そして、新八と平助は大きなため息をついたのであった。

第4話：取り引き

その頃、総司はすずとはずれの茶屋の中にいた。

「あの・・・話って？」

あの初めて会った日から何度か会ってきてはいるが、こんな早い時間に呼び出されるのは初めてだ。

（今日なら、あれを渡せるかもしれない・・・。）

恥をしのんで原田さんについてきてもらって買ったかんざしだ。なにしろ、総司自身では何を選んでいいか全く分からなかったのだから仕方ない。

・・・とはいえ、全く渡す勇氣もなく未だに胸元に入ったままになっていた。

「ごめんね。こんな早くに。うちのお客さんがね。どうしても総司くんに会いたいわって言うから・・・。」

すずは本当にすまなそうな顔をした。

「お客さん？・・・って？」

すずが答えるより前に殺氣を感じた総司は気づくと刀を鞘から抜いていた。切っ先は一人の浪士の首元についている。

「あなた方、何者です？」

総司は周りを見回す。

いつの間にか四、五人の浪士たちが総司とすずの周りを取り囲んでいた。

しばらくにらみ合いが続く。

隙だらけの浪士たちである。大柄で力もありそうだが腕は二流、いやそれ以下かー。

ここで倒してしまうのは総司としてみれば簡単である。しかし、

すがいる以上むやみに刀を振り回すのはためらわれた。
なによりずすにただの殺人鬼だと思つて欲しくなかった。

しばらくして、浪士たちの輪をかき分けて一人の男が出てきた。
「まあまあ、沖田総司くんとかいったな。噂に違わずすごい腕前だ。
試すような真似をして悪かったな。とりあえず刀をおさめてくれ。
オイ、お前らもだ。」

声を掛けられて周りの浪士たちは刀をおさめた。周りが刀をおさめ
れば、総司もおさめざるを得ない。

総司とその首領格の男は差し向かいに座った。周りを他の浪士が
取り囲む。

「とりあえず自己紹介をしよう。私は吉野吉兵衛という。長州藩士
だ。」

「・・・沖田総司です。」

（長州藩士？今最も京都を騒がせている奴らだとは聞いているが・
・。）

げげんそんな顔をした総司に吉兵衛が言う。

「君は今のこの国のことをどう思う？」

「・・・私には国のことはよく分かりません。」

「てめえ、ふざけてんのか！開国とか攘夷とか聞いたことねえのか
！」

横から別の浪士の怒声がとぶ。

「そんなこと言われても・・・。」

知らないものは知らない。近藤さんや土方さんがよく二人でなにや
ら今後の話をしているのは知っていたが、自分には関係ないものと思
っていた。だが――

「まあ落ち着け、作太。――沖田くん、我々は今来ている異国を追
い払うのがお国のためだと思つている。だが、幕府の腰抜け共はあつ
さり開国しやがった。我々はそれが許せない。だから。」
「だから？」

「我々と手を組まないか？」

「は？」

あまりの意外すぎる言葉に総司は言葉を失った。

新選組は市中警護が役目である。それゆえ特に常軌を逸した長州藩士を取り締まることが多い。そんな自分と手を組む――？！

「いや、私は……。」

「君はなぜ幕府に味方する組にいる？思想がないなら、なおさらそこにいる必要は無いはずだ。君は腕が立つ。我々と組んで、一緒にこの世の中を変えていかないか？」

「あの、私は――。」

言いかけた言葉をさえぎったのは作太と呼ばれた男だった。

「あんたは断ることはできないぜ。ほら。」

見ればさすが作太に手首をつかまれている。あまりの痛さにさすが顔をしかめる。

提案という名の脅迫――。

総司は背筋がぞつとした。

見れば吉兵衛もうすら笑いを浮かべている。

「そういうことだ。三日後にここに来い。もし万一手を組まないのなら、その時は壬生の八木邸と前川邸を焼き討ちする。まあ、それまでこの女は預かっておくれ。来なかったらどうなるか……分かってるだろ？」

そして卓の上に紙を置いた。

総司は怒りで真っ赤になった。手が震える。刀に手が触れる。

「おっと、今騒がない方がいいぜ。手元がくるっちまうかもしれないねえからな。」

作太がずすを引き寄せ刀を突きつけ、せせら笑う。

総司は精一杯の理性で絞り出す声で言った。

「ここに来ればずすさんは無事に帰してくれるんですか。」

「もちろんだ。いい返事を期待してるぜ。——っと、そうそう大事なことを言い忘れてた。お前、他の連中には言うなよ。言えばこの女は見せしめとして殺してやる。お前の目の前でな。」

いやらしい笑い声を残して吉兵衛以下長州藩士たちはすすを連れて茶屋を出て行ってしまった。

「総司くん——。」

声にならない声ですが総司を見たのが目に焼きついて離れなかった。

総司は卓に残った紙を見つめた。紙はだんだん輪郭をなくし、白いかたまりになっていく。

総司は目をこすり、やおら紙を荒っぽくつかむと茶屋を飛び出していった。

そして、その日は組の屯所に戻らなかった。

第5話：疑惑

「いよいよ帰ってきませんでしたね……。」

「総司もやるときややるんだって。」

「……しかし、総司も間が悪すぎる。よりによって土方さんが帰ってきた日なんて……。」

屯所では、藤堂平助、原田左之助、永倉新八の三人がひそひそ話しながら、朝ごはんを食べていた。

目の前にはむつとりとした土方歳三と、泣きはらした目をした近藤勇が座って黙々と朝ごはんを食べている。

(……気まずい……。)

いつもの陽気な朝はどうしたのか。皆が居心地の悪さを感じている中、突然歳三が目を閉じた。

「山崎君。」

「は、ここに。」

いつの間にか黒い影が歳三の横に控えていた。

山崎蒸。監察方でどういう訳か歳三の言うことは絶対服従なので、他の隊士から恐れられていた。こんな奴を使うのか――。

三人は目を見合わせた。

「山崎君。ご苦労だが、至急総司を探し出してくれ。見つけたら即刻連れて帰れ。手段は問わん。」

「了解しました。では。」

黒い影は風のように消えた。

再び重苦しい雰囲気が漂う。

「何もそこまでしなくても。我々も探しますし。なあに、すぐ見つ

かりますつて。なあ。」

新八がわざと陽気に言った。

「そう、そう。」

残りの二人も大げさにうなづく。

「では、我々も出かけるとしようか。」

立ち上がりかけた三人を歳三が一喝した。

「そんな必要はない！総司には山崎で十分だ。」

「そんな言い方ってないじゃないですか。私たちだって沖田さんのこと心配なんですよ。それをそんなー。」

いつもは温和な平助が歳三に食ってかかった。

歳三は再び目を閉じた。

「――実はな。ここが狙われているという情報があつてな……。」
声の主は近藤だった。

「他の連中が動揺してはいかんと想着黙っていたが――。」

「……しかもどうもそれに関して総司が一枚かんでいるらしい。」

「そんなバカな。」

「ありえないっすよ。」

「考えられません！」

三人が口々に言うのを制して近藤は続けた。

「わしもそう思ってたのだが……。最近の総司の行動、そして、昨日はとうとう帰ってこなかった。そして、これを見てくれ。」

近藤の手の上にのっていたもの……。それは火薬。

「山南君が昨日屯所の庭で見つけたものだ。彼はこういうの得意だからな。まあ、総司の件はともかく、ここが狙われているのは間違いない。いつかは分かんが、今君たちにここを離れられては困るのだ。」

三人は目を見合わせた。

「ここが狙われる」。想定外の事態である。いや、あえて考えないよう
うにしていたのか。

歳三は目を開けた。

「被害は最小限にしたい。他の連中にはしばらく市中見廻りの一環
と称して数箇所に移ってもらうことにした。ここには我々だけ
になる。心してくれ。」

目に覚悟が宿っていた。

部屋中に緊張が走った。

第6話：すれ違い

一方の総司。

あの後茶屋を出てから、どこをどう歩いたか分からない。

気づくといつの間にか鴨川のほとりに来ていた。

―どうしたらいいのか―

彼らが置いていった紙は五条大宮の辺りの普通の京町屋を記していた。

川の流れを見ながら、回らない頭で考える。

私が奴らの仲間になえなれば、すすさんを無事逃がしてやれる。屯所も焼かれずにすむ。組の皆を死なせずにすむ。

だが―。

私に組を裏切れというのか・・・それしか手はないのか。

誰にも相談できない苦しみ。それが、総司の理性の歯車を徐々に狂わせはじめていた。

「裏切るしかない・・・。」

ぼそつと独り言を言ったその時、

「――！」

いきなり黒い影が総司の目の前に落ちてきた。

黒い影の主は一瞬鋭い目を総司に向けた。

山崎さん?! 山崎さんだ! でも――なぜ?

山崎さんが身内で動くのはよっぽどの大罪の事態の時のみ。
よりによって、その山崎さんに――

(聞かれてしまった?!)

総司は目の前が真っ暗になった。

思わず後ずさりする。

その手を容赦なく山崎はつかんだ。

「土方副長の命令だ。即刻来てもらう。」

その声は無機質で、既に目は全く何の感情も写していなかった。

一言の弁解の余地もなく、総司は壬生に引き戻されてしまった。

* * *

気がつくと、総司は歳三の前に座っていた。

そこまでどうだったのか意識も定かではない。

歳三は目を瞑っている。

――土方さんは、私を疑っている――

山崎さんが現れた時にそう思った。「裏切るしかない」という独り言も聞かれてしまった。

でも、ここを切り抜けなければすすさんは助けられない……。

総司は覚悟を決めた。

歳三は目を開けた。

その目は冷徹そのもの。青白い光を放っていた。

――目を見ちゃだめだ。

総司は目を伏せた。

「総司。昨日はずいぶんお楽しみだったようだな。」
ぐさつとくる。涙が出そうだ。

「ーはい。」

「隊士たる者、あまりふらふら出歩かれては困る。総司。お前はしばらくこの屯所を出るな。これは命令だ。」

「な、なんですって?!」

思わず顔を上げて歳三の顔を見る。

だめだ、そんなことをしたらすすさんはー。

「何をあわてている。ただ数日屯所にいるだけだ。何も不都合はないはずだ。」

「いえ、それでは困るんです!」

総司は必死になった。

「どうしても行かないといけないところがー。」

「どこに。」

「えー、それは・・・。」

総司は言葉に詰まった。言ってしまうばすすさんが目の前で殺されてしまう・・・。元来ウソのつけない性格が裏目に出てしまった。

歳三は語気を強めた。

「言えないような所なのか!総司。何を隠している?あまり隠し立てすると裏切り者とみなすぞ!」

「もう裏切り者だと思ってるんじゃないですか!」

思わず総司は立ち上がっていた。目に涙が浮かぶ。

「山崎さんが来た時点でそう思いました。私は土方さんに信用されていないって。ならば、私は土方さんに何も言う必要はありません!失礼します!」

歳三も負けてはいない。

「俺はお前を信用していないなんて言った覚えはない!」

「だが本気なんだな? なら、そのつもりでかかってこい。俺もそのつもりでいる。覚悟しとけ。」

歳三の冷酷な声が総司の心に突き刺さった。

―もう戻れない。

「失礼します。」

総司はきびすを返して部屋から出ると、誰の顔も見ずに飛び出していった。

―もう戻れない。ここには。

歳三の冷徹な目が重かった。

第7話：罖

三日後、総司は日も落ちる頃に指定されていた町屋に着いた。

本当はもつと早く来ることも出来たのだが、そうするにはあまりにも心も体も疲れきっていた。

意を決して、コンコンと扉を叩く。

出てきたのは作太だった。

「よう、やっぱり来たな。」

下品な笑いを浮かべて総司を迎える。

「―すすさんは無事なんでしょうね？」

「おーこわ。そんな怖い顔しなさんな。ちゃんと無事だって。おつと、吉兵衛さんに会う前に、これは預かつとかないとな。」

そして総司が差していた刀を有無を言わず抜き取ると歓声を上げる。

「うおー。これがうわさの菊一文字かー。一回拝んでみたかったんだ。」

「話が終わったら返してくださいよ。」

総司は必死の理性でこらえる。

「もちろんだぜ。さあ、吉兵衛さんは隣の部屋だ。」

作太は愉快そうに笑ってふすまを開けた。

総司の前に視界が開ける。奥に小さな人影。すすさんだ！

「すすさん！」

部屋の奥で縛られているすすを見つけて総司は思わず駆け寄ろうとした。その瞬間―

ガンッ

頭に衝撃が走った。

不意の攻撃に思わずよろめいた時、数人の男たちに取り押さえられ

手足を縛り上げられてしまった。

いつの間にか吉兵衛が総司の前ににやにやしながら立っていた。

「総司くん——吉兵衛さん！あなた話が違うじゃない！なんで、こんなことするの！」

すずの声は震えていた。

「俺たちは長州藩士だぜ。最初っから新選組なんて手を組む気はねえよ。こんな奴ら早いうちに叩き潰しておくに限るんだ。そうすれば、俺たちもこの国も幸せになれるんだ。」

そして総司の方を下目遣いに見た。口元の端がいやらしく上がっている。

「自分ちが焼かれるのを指をくわえて見てな。それからゆっくり相手してやる。おい、行くぞ。」

吉兵衛はその場にいた浪士たちに出て行くよう合図した。

総司は何とか縄から抜け出そうともがいた。

しかし、もがけばもがくほど縄が食い込む。

総司はふう、と大きく息を吐くと、隣の同じように縛られているすずを見た。

「すいません、すずさん……。変なことに巻き込んでしまって。女の子一人助けられない自分が本当に情けない。」

「いえ……。私が総司くんの足を引っ張ってしまったんです。ごめんなさい。」

消え入りそうな声だ。

「なんとかあなただけでも、と思ったのですが……。っつ。」

「私のことより総司くんの方が……。屯所が焼かれちゃうんでしょ？　だめよ。そんなの。止めなきゃ。」

そうだ。いくらはずみで土方さんと言ひ合いをしてしまったからといって、黙って見ているわけにはいかない。

歳三の冷徹な目が頭に浮かんだ。ぞつとする。でも、それとこれとは話が別だ。

―何か手はないのか。

ふと、総司は胸元の冷たいものに気づいた。―かんざし！

総司は体を激しくひねった。

胸元から光るものが落ちる。カチツと金属音が響いた。

あわててそれを口でかみ、素早く辺りを見回す。

「総司くん・・・それ・・・。」

すずのつぶやくような声。

総司はそれには答えない。

「――！」

少し高めの窓に一つだけすり硝子がはまっているのが目に入った。当たれ――！ 祈るような気持ちでかんざしを飛ばし上げる。

ガシャ。

硝子は鈍い音をたてて、これを待つてたかのように崩れ落ちた。

総司は尺取虫のように硝子が落ちた所に近づくと、その破片のうち大きそうなものを自由にならない手で挟む。

そしてすずの手にかかっている縄をそれで擦りだした。

早く切れろ、切れてくれ――

額からは汗が滲み、手はあちこち切れ、血が次から次へと流れ落ちてくる。

いつくらいそうしていたんだろう。意識が遠くなりかけたとき、急に手元が軽くなった。

切れた！

思わず床に倒れこむ。

「総司くん！」

さすが総司の体を抱き寄せる。そして彼の縄を解き、自分の着物の袖を破ると彼の傷だらけの手に巻いてくれた。

あー、なんて暖かいんだ。すずの体温を感じながら総司は思った。

「すずさん・・・ありがとう。」

「何を言ってるの。本当にごめんね。ごめん。」

すずの涙が総司の手に落ちる。

これ以上すずさんを泣かせてはいけない。総司は立ち上がった。

「私、行きます。」

につこり笑った。

「はい。ご武運をお祈りしております。」

すずも微笑んだ。

もう迷わないー

総司は駆け出していた。

行き先は、もちろん、壬生。

第8話：激突

「土方さん！」

総司が壬生に着いた時、屯所はもう既にたくさんの浪士たちに取り囲まれていた。その数―五十人ほどか？

総司は息を呑んだ。彼自身が会ったのは四、五人。だがこれほどの人がいるとは――。いくら組の皆が屈強の手だれだとはいえ、人数に差がありすぎる。

総司は必死で駆けた。

時々、八木邸から煙が上がる。あれは山南さんお得意の爆弾攻撃――。

さてよ。総司はふと気づいた。

奴らは「焼き討ち」と言っただけだ。ならば、どこかに油の隠し場所があるに違いない。

総司は近くの町屋の屋根に上がった。大勢の浪士たちの動きでなんだか怪しげなところがある。

――あそこか！

総司は駆けた。

* * *

浪士の動きで怪しげな場所、そこは浪士たちの本営でもあった。吉兵衛や作太もいた。

「もうじき火の手をあげる。奴ら、まさかそこまでするとは考えてもいないだろ。ふふっ、これで終わりだな。」

「そうはいかない!」

意外な声に吉兵衛が思わず振り仰ぐと、そこには返り血で真っ赤になった総司がいた。さすがに肩で息をしている。

「なんで貴様がいる?!」

驚きは隠せない。

「油のありかはあなたのお仲間から聞かせてもらいました。もう火は使わせません。」

吉兵衛はせせら笑った。

「なにを。だが今更ありかが分かったところで一人ではどうすることもできない。」

総司はうつ、と言葉に詰まった。が――。

「それが、残念ながら一人じゃねえんだな。これが。」

急に張りのある声がした。

吉兵衛も総司も声のほうを向いた。

「新八さん!」

「私もいますよ。燃料はすべて回収させてもらいました。島原の人たち喜んでいましたよ。あそこ燃料いくらあっても足りませんからね!」

「平助……。じゃ、屯所の中にいるのは?」

「ああ、近藤局長と土方副長、山南副長の三人だけだ。十分だろ?」

新八が笑ってみせる。

総司も思わず笑ってしまった。

「本当ですね……。」

その時、浪士たちが一斉に三人に打ちかかってきた。だが手だれの三人である。

それを冷静に流して、新八が吉兵衛に一撃を繰り出す。

総司は作太の前に立ちふさがった。

彼の手にはあの菊一文字がある。

「その刀、返してもらおう。」

総司は刀を高く掲げた。

目はしっかりと相手を見ている。そこには一点の曇りもない。

作太もその刀を構え直した。

一拍の間

次の瞬間、一線が走り、愛刀は総司の手に戻った。

脇に作太が倒れている。

新八が走ってきた。

「総司、大丈夫か？」

「新八さん、こいつも屯所に連れて行ってください。」

「でも・・・こいつ。」

新八は浪士がぴくりとも動かないのを見て言葉を濁した。

総司は苦笑した。

「峰打ちですよ。こんな奴に腹を使うなんてもったいなすぎますからね。」

そして背を向けて歩き出した。

「おい、屯所はこっちじゃないぞ！」

総司は振り返った。

「新八さん・・・ありがとうございます。でも、でも私、もう屯所に帰れません。今までありがとうございます。他の皆さんにもよろしくお伝え下さい。」

「ち、ちよつと待て。俺はそんなこと認めてないぞ。お前は今でも新選組の仲間なんだからな！」

総司は困った顔をした。

「いえ、けじめはつけません。・・・そんな風に言ってもらってありがとうございます。では。」

そして新八の制止も聞かず走り出した。

第9話：仲間

星がきらめいている。ああ、こんなにも空に星があっただけ——
総司は土手の上に座っていた。
京に来てからというものの、忙しすぎてそんなこと考える余裕はなかった。

——これからどうしよう……。

不意に歳三や近藤、新八たち仲間の顔が浮かんた。

「別れたくない……。」

思わず声に出してしまっていた。

そう、別れたくない、みんなと。

そう思った瞬間。

「総司。」

上から声がした。いつものよく知った声だ。

——私を始末しに来たのか……。

振り返る勇気なんてない。殺るなら一思いに殺ってほしい。

そうすれば少なくともこれから先、たった一人ぼっちで生きていかなくてもいい。

「総司。」

再び声がした。すぐ隣にいるのが分かる。しかし声の質は硬く、氷のように総司の心に突き刺さった。

おそるおそる顔を声のほうへ向ける。そこにはいつもと変わらない歳三がいた。

でも今の総司には直視する勇気がなかった。

「土方さん……。」

心なしか声がかすれる。今さら元のように戻れるハズはない。はずみとはいえない言い合いをしたことで裏切りを答えてしまったようなものだ。

でも……それでも……。

「総司。」

再び声が聞こえる。次の言葉は何であれ、もう土方さんたちと楽しく笑いあうことはないんだ。

「土方さん。私は——。」

「悪かったな。」

「え?!」

総司はあまりにも意外な言葉に虚をつかれて、思わず歳三の顔を正面から見た。照れているのか、心なしかその目の光は優しくかった。

「な、なんで土方さんが謝るんですか？悪いのは私です。一時とはいえ、組を裏切ろうと思い、あげくに組のみんなを危険にさらしてしまっただけです。」

「組が危険と隣り合わせなのは当然だ。」

「しかし……。」

「それに、お前は好きな女を助けようとしたただけだ。そうじゃないのか？ それを見捨てるのは仁義にも劣ると思うが。」

「……。」

目に熱いものがこみ上げてくる。泣いちゃだめだ。泣いちゃだめだ。

「俺が言いたいのは。」

歳三は軽く咳払いをして続ける。

「京に来てから、ロクにお前と話をしなかったと思ってな。そこを付け込まれたんだ。不安にさせてしまっただけ悪かった。」

「土方さん……。悪いのは私なんです。許してください。ごめんなさい……。本当にごめんなさい……。」

「総司、お前……何泣いてんだ——らしくないな。」

歳三はちよつと困った顔をした。

でも一旦流れ出た涙は止めようもなく、顔を伏せてただただ声を押し殺して泣き続けた。

歳三はその間ずっと肩を抱いていてくれた。そして何言かささやいた。それは小さく、でも力強かった。

そして、その手はとても暖かった。

* * *

―が、その様子を見ていた人たちがいる。

「どう見てもあれは人たらしだな。」

「私もそう思います。」

途中から歳三がいらないことに気づいて探し回っていた新八と平助であつた。出るに出不られなくなつてしまつたらしい。

「まあ、仲直りしたみたいだからいいけどな。しかし、これを山崎が見たらどうなるか。」

「あの人だったら、まず理性とぶでしょうね。私たちが止められるでしょうか……。私ちよつと心配です。」

「右に同じ。―つて、平助！ 土手の脇の木の上にいるの、あれ山崎じゃねえか?!」

「えっ?! うわゝいつの間に?! 目え血走ってますよ……。どうしましょう。」

「どうしましょう、じゃねえ！ 止めるんだよ、奴を。」

反射的に新八が投げた短刀と、山崎が総司に向かって投げた手刀が総司の上で重なり、乾いた音を鳴らした。

同時に新八と平助が飛び出す。

「うわっつ。な、なんだお前ら――。」

歳三が赤面する。よもや見られているなんて露ほども思っていなかったらしい。動きもどこかきこちない。

「話は後です。とにかく山崎さんを止めてください。」

「山崎?!」

見ると歳三のすぐ横で赤い目をした山崎が控えていた。ただ、その目は恨めしそうに総司を睨んでいた。

「山崎君……。君も見てたのか……。」

「私は常に土方副長と共にありたいと思っておりますゆえ。」

(すごい忠誠心だよ……。)

思わず顔を見合わせる新八と平助。

つくづく面白いメンバーが集まったもんだ。そして強い。総司は苦笑してしまった。

「土方さん! 今日はありがとうございました。私はもう大丈夫です。次は山崎さんに時間を分けてあげてください。では、失礼します。」

「ち、ちよつと待て……。まだ話は……。」

本気で困惑する歳三を尻目に歩き出す。その足取りは軽い。

「じゃつ、俺たちも失礼するか、平助。」

「ええ。では土方さん、明日の隊務に支障がでない程度に帰ってきてくださいね。」

新八も平助も笑いをかみ殺している。

「おい、お前ら!。お前らには人の心つてもんがないのか——。」

歳三の声が夜空にこだました。

第10話：花の香り

数日後、京の料亭に入る人影があつた。

「宮部さん。」

「よう、桂さん。遅かったな。」

椅子に座っていた大柄な主は後ろを振り返ってニタツとした。そして前に座るように指差した。

「・・・遅いのは当たり前ですよ。先日の件で幕府からも藩からもあちこち呼び出されて、ホント大変でしたからね。」

大げさにため息をついて宮部の前に小五郎が座る。

しばらく沈黙―。

「あなたでしょ。」

上目遣いに宮部を見やる。

「何のことかな？」

「とぼけないで下さい！ あなたが先日の長州藩士たちの暴走をおつたんでしょ。新選組なんていうあやしげな団体の内部崩壊を狙つて―。」

「ははは。桂さん、想像力が豊かだな。馬琴のように小説書くか？」

「勘弁して下さい・・・。ただでさえ、長州でたきつけられた若い連中がやたら京に入ってきているんですから・・・。」

宮部は首の後ろをぼりぼりかくと、割り箸の角で卓をぐんと叩いて小五郎をまっすぐ見た。目の奥に鋭い光が見える。

「あんたの推理、当たらずも遠からずだが、一つだけ全く違うことがあるぞ。俺はあんたと違って新選組なんてただのごろつき浪士の集団、取るに足らないものだと思ってる。わざわざ内部崩壊させるまでもないだろ。だが、そんな奴らでも敵だ。少しは情報が欲しい。

それでどんな奴らか試してみたまでのことよ。」

小五郎はため息をついた。そんなことに長州の連中を使われてはたまらない。だが、彼の中に人にそこまでさせてしまう魅力があるのは認めざるを得ないのだ。

「それで、どうでした？」

「・・・少しは骨のある奴もいるようだな。ある種厄介かもしれない。だが、最後に勝つのは俺たちだ。」

再び沈黙―。

小五郎はやおら胸元から懷紙を取り出した。中には胃薬が入っている。

「まだ治らんのか？ お前、体弱いなあ。」

あきれ声が飛ぶ。

「誰のせいだと思ってるんですか！ 全くもう。あなたといい、晋作といい、無茶ばかり。後始末する立場のことも少しは考えて下さらないと。」

宮部はにやつと笑った。

「今は時代が動いてるんだぜ。今無茶しなくて、いつ無茶するんだ？俺は俺のやり方でこの世を変える。」

宮部は立ち上がり小五郎の肩を強く叩いた。

「まあ、見てな。その頃にはあんたも胃薬とおさらばだぜ。」

そして手を上げて店を出て行った。

小五郎はため息をついて一気に薬を飲み干した。

（今度は一体何をするつもりなのか―。）
口の中に苦い味が広がった。

* * *

同時刻―。

総司は夜空を見上げながら、歳三が言った言葉を反芻していた。歳三が肩を抱いてくれていた時に言ってくれた言葉。

——俺を信じろ、総司。俺は俺のやり方でこの世の表舞台に出てみせる。お前が不安に思えないくらい強くなってやるから、俺についてよく見とけ——

ええ。土方さん。もう迷ったりしません。私もあなたと一緒にどこまでも強くなっていきたいんです。

星がまたたいた。そんな気がした。

* * *

翌日。

「総司、これ土方さんから渡すようにって頼まれたんだが——」
新八が持ってきたそれはあのかんざしだった。飾りの花は欠けボロボロになっていた。

総司は黙って受け取った。

彼女はあの後、歳三に一部始終を話してくれてたのだろうか——。

（すずさん、無事に帰れたんだ。）

ほっと息をついた総司に新八が声をかける。

「それ、例のかんざしだろ？」

「？」

「ほら、左之と一緒に買いに行っただっていう——」

総司は赤面した。ある程度覚悟していたとはいえ、かなり恥ずかしい。

「大変だったんだぞ。なんで左之の奴と行ったんだ——！って、土方

さん、怒り狂ってたからな。」

そして大げさに息をついてみせた。

「で、俺はこれよりよっぽどセンスのいいのを選んでやるってさ。息巻いていたぜ。」

総司と新八は大声で笑った。曇りのない笑いであつた。

（あとですずさんにお礼を言いに行こう。その時は土方さんの選んでくれるかんざしを持って―。）

かんざしはほのかに花の香りがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9122e/>

幕末異聞 疾風録～花薫る京の嵐

2010年10月8日21時23分発行